
モンスターハンター ～幾重の絆～

江久世蓮人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～幾重の絆～

【Nコード】

N8795H

【作者名】

江久世蓮人

【あらすじ】

15才になり念願のハンターになったラグナ。しかし村に帰った彼に待っていたのは親父の死！？初っぱなから幸先不安なラグナの物語。基本ラブコメ、シリアス少々、後はその時の作者の気まぐれで！！今回初作品なんで色々変な文章？あるかもです。それとこの小説はモンスターハンターPGだけでなく、モンスターハンターフロンティアからも絡んできますので、スキルなど様々な箇所違和感を感じる方がいらっしやるかもですが、使い分けていくのでご容赦ください。頑張って更新するんで応援よろしくお願いします！

!

第一話 喜びと悲しみ（前書き）

誤字、脱字、指摘、批判、感想、要望、些細なことでも嬉しいので待ってます

第一話 喜びと悲しみ

舞台は人間とモンスターが存在する世界、首都ドンドルマから南に位置する小さな村、モーゼス村。

この村には2人のハンターがいた。15才になりハンターの資格を得てつい先日ギルドでハンター登録を済ました新米ハンターのラグナ・スクレイパー。

もう一人はラグナの育ての親であり師匠でもあるセネル・スクレイパーだ。

ラグナは5才の時に事故で両親を亡くして以来、セネルが引き取りモーゼス村で暮らしていた。

ラグナはセネルとは血が繋がってないが、本当の親の様に尊敬し、慕っていた。その為小さい時からハンターとしてセネルの背中を見てきたラグナは、自分もハンターになることを望み、遂にハンターになった時はギルドで人目も憚らずに泣いた。

「…うう…うう…ううッ…」

ラグナはギルドの受付で泣いていた。

「おめでとう。ホラッ、男の子がいつまでも泣かない」

そう言って受付嬢がハンカチを差し出してくれた。

「うう…ありがとうございます…ズズズウ…ツッ」

涙と鼻水も一緒にかんで、落ち着いたのか、笑顔でハンカチを返し

た。

「……………」

苦笑いしてハンカチを受け取った受付嬢。

「ええ〜と…私の名前はモモね。ハンター制度の説明…聞く？」

三秒ほど考えてラグナは頷いた。

「あいよ まずはハンターのランクからね。HRは1〜9まであって、1〜4が下位、5〜7が上位、8〜9がさらに上のG級よ。ラグナ君は登録したばかりだからHR1からのスタートね。HRの上げ方は規定数のモンスターの討伐、村や街への貢献度、他にも様々な項目があるわ。それはギルドが判断するから。不安はあるかもだけど、実力次第の世界だから自ずと結果はついてけるから。ここまでは大丈夫？」

「はい。続きを」

「じゃあ続きね。HRによって受注できるクエストが制限されてるから気をつけてね。次にPTについて、別に一人でも出来るクエストもあるし、馴れ合うのが嫌なハンターは一人で狩りに行くわ。けど基本は4人で行動するわ。報酬は低くなるけど、達成率は安定するし、リスクも軽減されるから。気の合う仲間と狩るのもいいし、目的の為にその場限りのPTを組むのも結構よ。ざっとこんなものかな。何か質問は？」

「ん〜特にはないですね。ありがとうございました!」

「そう。これからハンターとして頑張ってね」

ラグナは笑顔で答えるとギルドを出た。

「さて、村に帰ろうかな。」

この時ラグナは考えてもいなかった。なんな事が起きていたなんて…。

ドンドルマのギルドから船で1日かけてラグナは村には村に戻った。

村に着くとなにやら重い雰囲気にもまれていた。

「何があつたんだろう？あつ！村長！ただい

「ラグナ！！帰ってきたのか！？すぐわしの家に来るんじゃ！」

ラグナは首を傾げながらも村長についていく。

客間に入ると村長が真剣な面持ちでラグナを見つめている。

「ラグナ…」

「村長…ごめん！！俺そつちの趣味は無いんだ…それに村長はもう歳も歳だし…」

少しの沈黙。

「ラグナよ…セネルが死んだんじゃ…」

「…えっ…今なんて…」

ほんとは聞こえていた。聞き間違いとか村長が騙しているんじゃないかと思って聞き直した。セネルは凄腕のハンターとまではいかななくても熟練ハンターだ、よほどの事でない限り間違いは起こらないはずなのに。

「火山でのグラビモスの討伐をしていたらしい」

村長が静かに話し出した。

「無事グラビモスは討伐したらしい。じゃが討伐後に採取をしていたら突然後ろからブルファンゴに突進されて溶岩の海に落ちたらしい……」

「なッ!? (親父…めちゃくちや悲しいんだけど…ダサイよその終わり方!!!)…」

村長はプルプル震えている。

村長は一本の大剣を差し出した。

「これは以前セネルが使っていた大剣だ…ラグナが使ったほうがセネルも剣もよろこぶじやろう」

差し出された剣を無言で受けとる。ずっしりとした重量感が手に伝わってくる。ブレイズブレイドだ。抜刀時に収納された刃が出る大剣だ。

「ラグナよ。ワシはそなたにこの村にいてほしいとおもっている。しかしセネルはそうは考えてなかった。ラグナには大きな世界をみてほしい。といつも言っておったよ」

「親父がそんなことを…」

「なのでラグナ、村を離れて広い世界を見てほしい。そこで何かを感じ、人と出会い、成長してほしい。たまには元気な顔も見せにこないでだめじゃぞ」

「分かったよ村長。やってみる」

第二話 旅立ち、そして出会い

セネルが死んで一週間。首都ドンドルマに来て3日、引越しゃ色々な作業を終えてラグナはベットにダイブした。

「ふう〜。やっと落ち着いたかな」

ラグナが引越してきたのはセネルが昔住んでいた家だ。モーゼス村で住んでいた家よりは少し狭いが一人で暮らすには十分だった。必要最低限家具にセネルが残したお金、自分が用意したものはなく苦労はしなかった。

「身体が鈍ってる…俺はハンターだ。狩りに行く」

ラグナは新米ハンターとはいえ、小さい時からの訓練で基礎的な事は出来ていて。実践経験はないが不安はなかった。

バトルシリーズを身に纏い、ブレイズブレイドを背負って所持品の確認。防具は頭装備だけレッドピアスだ。

鏡の前に立ち全体チェック!!

ラグナも年頃の男の子だ。身なりは気にする。真っ赤な髪に深紅の瞳、活発な男の子がそこにいた。

「腹も空いたし…酒場に行ってみよ」

酒場の扉を開く。酒場独特の香りがする。ラグナはこの臭いが、そして空気が好きだった。見渡すと20人ぐらいのハンターがいた。ラグナのようなまだ子供はいない。基本、新米ハンターは一年以上は先輩のハンターと共に狩りをする。しかしラグナは一人だ。頼れ

る人はいない。

「おいボーヤ。場所間違えてねえか？お家にけえりな〜」
と周りから野次がとんだ。初日から目をつけられると面倒なのでラ
グナは無視しようとした。頭では。身体は…

「おい、あんた」

「ん？なんだ？お家が分からなくて迷バキツ」

ラグナはその男を殴っていた。ラグナはわりと喧嘩っぱやい性格だ
った。

「てめえこのクソガキがー」

いいぞ〜やれやれ〜と周りから野次が飛ぶ。血の気が多いのは仕
方がない。だってハンターなんだもん　みつを。

「ガンッ」

「ゴンッ」

「うぐっ」

「ぐえっ」

ハンマーの銀鍋【喜喜】を振り回すお姉さんがいた。

「あんたら！喧嘩は外でやりな！じゃないと…潰すよ？」

飛竜さえ逃げ出すんじゃないかと思う禍々しいオーラを纏っていた。

「ゴメンナサイッ」

ラグナと男は双子のように声を揃えて謝った。

事が収まり、お腹が空いていた事を忘れていたラグナは料理を注文して奥の席に座った。

男に殴られた傷よりも鍋で叩かれた方が痛かった。

「ほい。おまちどろってあんたさっきの」

「はいッ!! さっきはすいませんでした!!」

この人は逆らっちゃダメだ。ラグナは本能で理解した。

「んん? よく見たらあんたまだ新米だね? 見たことないし。どうせ何か言われて絡まれたんだね」

「最近こっちに越してきたんです。あつ、ラグナって言います」

「あたしはミカ。この酒場で働いてるわ。よろしくね。あんな奴らだけど根は悪くないから許してやって」

話も済んで食事を終えたラグナは受付に向かった。

「はあゝい。こんにちは。今日はどついったご用件で?」

「あなたの心を捕獲したいんですが」

「はあゝい。HR9と年収1000万ゼニーと契約金100万ゼニー

「が必要ですよ。あなたはまだ規定のランクではありませんね。無理せず頑張ってくださいね。」

120%の営業スマイルで一刀両断された。ハンターの道程は険しく、そして長い。

「ぐっ…。はい。初仕事なんで何かクエストないですか?」

「あなたのHRだと、ランポスの討伐はどうでしょう?」

バカにされたような感じだがまずはそれから始めていいかな。

「じゃあそれをお願いします」

「はあゝい。ではPTはどうしますか? 掲示板に貼って募集もできますが」

正直ランポスの討伐なんて誰も来ないと思ったが、募集することにした。理由は…ラグナは生粋のサミガリータである。

「はあゝい。では番号札を持って席で待ってみてくださいね。来ないと判断したら番号札を返却して出発してください」

8の番号札をもって席についた。

「30分ぐらい待ってみるかな」

10分経過

「…」

15分経過

「……むう……」

20分経過

「………だよなあ……」

来るわけないかと思いい机に頭垂れた。

その時

「………いい、ですか？」

ラグナは手をヒラヒラさして頷いた。

「………」

「………」

「………んん？」

「………はい？」

ガバァ！！とラグナは起きた。

「ひい……！！」

「一緒に行ってくれるのか!？」

涙目でラグナが迫る。

「え……あの……いいですか？」

「もち……！ぜひと……無理矢理にでも連れていく……！逃がさねえ……！！」

後半は意味不明だが仲間が出来たラグナは嬉しかった。

「俺はラグナ・スクレイパー。年は15。大剣使いだ。よろしくな
!!!」

「わ、私はリーナ・プリステンと言います。年は同じ15で、片手
剣使いです。よろしくお願ひしましゅ!!」

最後囁んだな…。

「ぶっ…よろしくな。リーナ」

こうして二人はクエストに出発した。

第三話 強さの根源（前書き）

どうも、江久世蓮人です。えっ？前書きなんて要らない？すみませ
ん（T―T）そういう方はお手数ですが1のボタンをクリック！
やっと戦闘シーンが出てきます！はい！ですが期待しないでくださ
い！！文章力皆無ですから…でも頑張ります！！応援よろしくお願
いいたします

第三話 強さの根源

ドンドルマの町から西の方角ある密林地帯、竜車に揺られた頃にはお昼前だった。

密林につく前にラグナはリーナと話したことを思い出す。

「リーナってハンターに成り立てだよな？」

「えっ、あ、はい。そうなんです。始めてで不安だったんで掲示板見たときにこのクエストなら大丈夫かもって思って」

リーナの装備はチェインシリーズに頭装備だけレッドピアスだ。武器はハンターナイフだ。

「そっか。おれも始めてだから一緒に頑張ろうな！！ランポスは6体狩猟だからすぐ終わるだろ」

「えっ？」

「どした？」

「ラグナさんも初クエストなんですか！？」

「ラグナでいいよ。そうだけどうかつた？」

リーナの顔が少し青い。

「防具もそうだし武器も新米ハンターに見えなかったの…よし！
！帰りましようーランポスは危険です！！」

「いやいや。少し落ち着こう？ランポスぐらい倒せなきゃハンター
としてこの先やっていけない」

「…ううっ……確かに」

「それに俺もフォローするし、危なくなったら助けるし、ね」

「はい…」

リーナは渋々了承した。

「じゃあそれだけ？俺と組んだ理由」

「あと…髪が同じだったから…私も真っ赤な色だし」

ちよつと照れ臭そうにリーナは答えた。

「お揃いだな」

するとリーナはカア〜と顔を真っ赤にさせた。

それ以降気まずい空気になりキャンプにつくまで会話はなかった。

回想終了

とりあえず支給品からアイテムを取りだし、リーナにも渡す。

「モンスターが向かってきたら俺から離れないでね？」

「は、はい!」

リーナがラグナにくっついた。

「…いや…俺動けないし…それに一定の距離は開けてね? 剣が振れない…」

「はっ、すみません…」

不安になるラグナだった。

少し歩くとアプトノスが草を食べていた。

「よし。ちょうどお昼だし、飯食おう」

リーナは頭に?をつけていた。

「じゃあリーナ、アプトノス狩ってみて? どれだけ動けるか見たいし」

「はい!」

リーナはアプトノスに向かっていくと、脚に回転斬りを当てアプトノスを倒れさすと素早くアプトノスの前方に移動して急所を滅多斬りした。

ラグナは驚いた。倒すとは思ってたが、まさかこんな戦い方をするとは思ってなかったのだ。動きもいいし戦い方も間違いない。アプトノスは半端に攻撃するとすぐさま逃げるからだ。

「すごいじゃん。驚いた」

「えへへ」

「じゃ、ありがたく剥ぎ取りますか」

生肉をゲットし、肉焼きセットを使ってこんがり肉を作った。

「ほい。食おうぜ。」

そう言っってこんがり肉を渡して食事を終えた。

「さて。腹も膨らんだし、いっちょやりますか!」

「はい」

しばらく進んでいくと遠目にランポス3体を発見した。まだこちらに気付いてないようだ。

「じゃあ次は俺の番かな。リーナは見てて」

気付かれないように接近し一気に距離を詰める。そこでランポスは
気付きギヤアアアツ　ギヤアアアツと威嚇してきた。そんなこ
とお構いなしにランポスに近づく、残りの2体も気付き攻撃体制に
入ってきた。

「いくぞオラアーツツ!」

目の前のランポスがそのまま噛みつくこととする。

ラグナは不敵に笑い、回避せず噛みついてきた頭に抜刀斬りを食らわせる。

ザシユ！！と音と共にランポスは吹き飛んだ。そのまま弱々しい鳴き声をあげて絶命した。

振り抜いた直後に横からランポスが飛び掛かる。ラグナは放った斬撃の慣性をそのまま利用し前転し攻撃を避けるとそのまま攻撃モーションに入り振り返り際になぎはらい、ランポスの首を斬りつける。これで2体目。残りのランポスは瞬く間にやられた仲間を見て困惑し逃げ出そうとしていた。

「逃がすかーッッ！！」

距離を詰め、ランポス背中に抜刀し斬りつける。ランポスは吹き飛び、起き上がるが、すでにランポス眼前には刃が迫っていた。

ラグナはなぎ払い、ランポスの血を振り落とす。周囲にモンスターがいないことを確認すると、背に大剣を戻した。

「リーナ。もういいぜ。剥ぎ取りして次行こう」

「う、うん。わかった（ラグナくんかっこよかった）」

ほんのり顔を上気させている。

新米ハンターにとってランポスは決して楽な相手ではない。しかしラグナにとっては問題ではないのだ。

それはラグナの育ての親であり師でもあるセネルの訓練の賜物である。

あれはラグナが12才の時、すでにラグナはランポスを狩り始めていた、そんなラグナに師であるセネルは、

「ラグナ！！今日は防具無し、つまり裸でランポスを倒せ！！」

普通であれば12才の少年にこんなことは言わない。死ねと言っているようなものだ。しかしセネルは普通じゃない。バカなのだ。そして弟子であるラグナも、

「ふざけんなよ！？バカ親父何考えてやがる！！裸だと！？パンツぐらいはかせる！！」

バカだった。しかしバカとはいえ危険性は理解していた。一撃でも食らったら良くて大怪我、悪ければ即死だ。

しかしラグナは怯まない。これしきの事が出来なくてハンターなんて出来るか！！とセネルがいつも言っているからだ。ラグナもそれを信じていた。バカなのだ。そんな訓練をしているハンターはいない。

そんなこともあり、ラグナにとってランポスは恐ろしい対象でもなんでもない。他にも特殊な訓練もあるがまた追々…

この後、ラグナが3体、リーナも4体倒してキャンプに戻り、町に戻った。

「リーナ！！お疲れ」

「ラグナさん お疲れ様です」

「呼び捨てでいいって。それに敬語も無し！！」

まだ堅い部分もあるが2人はだいぶ打ち解けていた。

受付で狩猟証明の素材を渡して報酬を受け取った。

それを2等分しリーナに渡す。

「いえ、私はいりません！！今回はほとんどラグナさ…ラグナが倒したんだし、受け取れない、です」

「はあ？いくらか少ない報酬でもリーナは受けとる権利があるし義務があるんだよ。黙って受け取る！！」

「……………」

釈然としないリーナにラグナは、

「じゃあ今から飯食おう！！それをリーナが奢るってのはどつ？」

するとにぱあ〜っとリーナが笑顔になる。

「早速食べましょう」

しかしラグナもリーナもこの事をすぐ後に後悔することになる。

第三話 強さの根源（後書き）

何が起こるのか…フフフ…考えてないです）．．．（

第四話 葛藤の末に

「カンパ〜イ」

ビールを飲み楽しそうな2人、この世界ではお酒、タバコなど15才から認められる。

ラグナは小さい時から訓練を受けているからお酒はそこそこ強い。

あれはラグナが10才の誕生日の時だった。

「ラグナ！！誕生日おめでとう！」

セネルと2人だけだがそれなりに楽しかったし、祝ってくれる事は嬉しかった。

「ドンッ」

「誕生日のプレゼントだ。喜べ！！」

ラグナはこの時初めてプレゼントをもらった。

「ありがとう！！開けていい！？」

「おう。開けてみる」

ラグナはワクワクしながら箱を開ける。

「……………」

【特選大吟醸 神殺し】

箱を開けたら大タルがあり、表面に達筆な字でそう書かれていた。

「何これ？」

「お前もハンターになるんなら酒は飲めなきゃならん！！今から強くなるんだ！！酒が強くないとハンターにはなれん！」

「そうなの！？知らなかった…ハンターになるにわそんなスキルまで備えないとだめなのか」

師もバカであれば、また弟子もバカである。

「ありがとう師匠！！俺飲むよ！！」

本当はセネルがいつも一人で晩酌するのが寂しいからラグナも飲めたら…というくだらない理由から始まったのだ。

その日ラグナが急性アルコール中毒になったのは言うまでもない。

そんなこともありラグナは酒が強く、ビールなんてジュースの如く飲んでいる。しかしそのペースに合わせていたリーナは、5杯目ですでに出来上がっていた。料理も注文しまくって、ラグナが日本酒に切り替えた時、

「ラグナ、あたすの分もそれ頼んで」

もはや完璧に態度が崩れている。

「リーナ？イケるか？無理せんでいいで？」

「ラグナく飲む言ったら飲むちゆうねん！！はよ出せや！？」

もはや人格まで崩壊していた。

「おい…大丈夫か？」

「バツ」

リーナがラグナの手から日本酒を奪い取った。

「えへへへ。ゴクゴクゴク」

「り、リーナ？」

リーナは、にぱあと笑顔を向けた途端、

「ゴツツ！！」

テーブルに頭突きをかまして異世界に旅立った。

「今日はこれくらいでやめとこうか。すいませーん。御愛想で」

「はあ〜い。えーお会計6450ゼニーになります」

「ぶっ！！」

ラグナは吹き出した。

「リーナく？奢りじゃねーの〜？」

返事がない…ただの屍のようだ…。

ラグナは会計を済まし席に戻った。そこでラグナはふと疑問に思った。

「リーナって、家どこだよ……」

ラグナは冷や汗をかいた。

「おいリーナ！！起きろ！！帰るぞ！」

「スピー、スピー、スピー」

「完全に熟睡だな…置いていくか…それはだめだな…泊まらせる？
だめだな…間違いが起きない可能性はない…だがしかし…」

考える事が面倒になったラグナは、リーナを背中に背負った。つまりおんぶ。つまり家に入れることを選んだ。

「俺さえしっかりしていればいいし、リーナも朝まで起きないだろう」

ラグナ家

「やっとついた〜リーナをベッドの上におろして、と。風呂でもはいるっ」と

防具を脱いで風呂に入り、タンクトップとスウェットに着替える。

問題はリーナだ。防具のままベッドに寝てほしくない。まずは起

こしてみるか…。

「おいリーナ？大丈夫か？」

リーナはうつすらと目を開けた。

「水飲むか？」

「……………（コクコク）」

持ってきた水を飲ませる。まだ酔いは醒めてないようだ。そのままゴロンと横になった。

「おい、リーナ？寝てもいいんだが防具脱いでくんない？悪いんだけど」

「……………（コクコク）」

のそりと起き上がりゆっくり防具を脱いでいく。キャミソールと下着一枚になった。

ラグナは極力見ないようにしてリーナを横にして布団を掛ける。リーナが脱いだ防具のそりと汚れを落としてきれいにして壁に掛けた。

「ようやく落ち着いた。頑張った俺。さて寝るかな…床で…」

「（やっぱり惜しいことしたかな？まあいいか…明日リーナをからかう事で我慢しよう）」

こうして夜は更けていった。

第四話 葛藤の末に（後書き）

どうも、江久世蓮人です！！やっぱり読むのも楽しいですが、書くのも楽しいです。そこで読者の皆様！！3人目のキャラの募集をしたいと思います。イエイ！！えっ？めんどい？そうおっしやらずに！！感想で【第三の人物】って書いて、名前、性別、主要武器、性格、容姿など何でも良いです。てかこんなキャラ出せや！？って言う強者も大歓迎です！！期限はテケト〜に一週間で！！皆さんのご意見お待ちしてま！！（けして新しいキャラ考えるのが面倒って訳じゃないです。はい。）

第五話 優しさに包まれて

「起きるニヤ〜起きるニヤ〜朝だニヤ〜パシッ！」

起こしたのはオトモアイルーではない。目覚ましの音だった。ラグナはオトモアイルーを飼ってはいない。オトモアイルーはそれなりのHRやネコばあの信頼がないと飼えないのだ。

只今の時刻は朝の5時。ラグナの朝は早い。

まずは顔を洗い歯を磨く。そして準備運動の後、腕立て100回、腹筋100回、背筋100回を3セット。ラグナがハンターになると決めた時から毎日欠かさずこなしている。15才という年齢で重量の大剣を自由自在に操るのはラグナの努力の賜物である。

朝のトレーニングが終わるとシャワーを浴びて汗を流す。時刻は7時前、寝室を覗くとリーナハンターまだ夢の中だ。

「とりあえず、朝飯だな…2人分…」

朝の市場に行き頑固パン、シモフリトマト、スネークサーモン、レアオニオン、猛牛バター…あと胃薬を買って家に帰る。

調理開始

完成した料理をテーブルに並べる。あとは起こすだけ。ラグナは気味の悪い笑いを浮かべた。

「リーナ。朝だよ〜起きて」

軽く揺すって声を掛けた。

生気を失った顔ををしているリーナに、いじめすぎたかな?と思いいラグナは、

「何もしてない」

それを聞いたリーナは、

「えっ…ホント…に?」

「確かめてみる?」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

顔を真っ赤に染め首を振るリーナ。

「残念 ホントに気分は悪くない?」

ラグナは昨日の事を話聞かせた。

必死で謝ってくるリーナ。

「いや別にいいよ。楽しかったし。話は変わるけど親とかは心配してない?」

リーナの顔が一瞬曇った。

「私ね、親はいないの。だから孤児院で生活してたんだ。でも15才になってハンターになってからは孤児院を出て本当の一人ぼっち」

「今はどうしてるの?」

「宿屋で生活してる」

ラグナは何か考えてる。

「リーナ。俺とチーム組まない？」

「どうして？」

「気に入ったから」

「えっ？それだけ？他にあるでしょ！？腕を認めたとか、可愛いからとか！！」

「ぶっ！！それ自分で言う！？まあでも腕は認めるし可愛いのも認めるよ。でもそれは前提条件だから。腕があっても気に入らなかつたら誘わないよ。で、返事は？」

「私でよかつたら、よろしくお願いします」

二人は握手を交わした。

「んじゃ早速荷物運んできなよ」

「ん？何の荷物？」

「リーナの。ここで今日から暮らすから」

「えっ…：ちよっ！！なんでそ

「あゝあゝ昨日はほんと大変だったな。あつ！昨日のディナーってリーナの奢りだったけ？これ領収書…：でどうする？」

領収書を見てリーナは諦めた。足りない。

「何も異存はありません」

「よし 決まったら全は急げ。その前に腹ごしらえだな」

「えっ？もしかしてラグナが作ってくれたの？うう…ごめんなさい
ダメな女で」

自虐モードのリーナを宥めながら朝食がおわった。

「じゃ、俺はリーナの部屋を作りますか」

こうしてリーナが正式に仲間になった

リーナは気付いていた。ラグナは心配してくれている事を。わざとあんな言い方をして私に気まづくさせないように。私を一人にさせないように。絆を作ってくれた。

「ラグナ、ありがとう」

第五話 優しさに包まれて（後書き）

どうも、江久世蓮人です。展開遅くてすいません。次は戦闘シーンに入りそうです。おそらく、多分。引き続き、【第三の人物】募集です。感想なども待ってます。でわでわノシ

第六話 憧れのガンナー（前書き）

どうも！！江久世蓮人です。お先に謝罪を。すみません！！前回の後書きで戦闘シーンが出るといいながら、今回はなしっす。なんすか？え？開き直り？気にしない気にしない！！少し変更点が出てきたのでそれを修正したら今回は戦闘シーンは見送られました。まだランポスしか狩ってないよ！！でも戦闘シーン以外の生活シーンも大事にしたいのですはい。どちらもこなせるように善処します。でわ第六話です。どぞ。

第六話 憧れのガンナー

「リーナはそのまま片手剣で狩りを続けるのか？」

リーナのプチ引っ越しを終えて、書類上の作業も終えた2人は、酒場で昼飯を食べている。

「この武器を使いたい！！とか、この武器を愛してる！！とか、好みでいいんだけど」

「私は最初は片手剣が新米ハンターには扱いやすい、って聞いたんで使ってたんです。でもそうですね、好きな武器って言うより憧れる武器はあります」

「ウンウン。何の武器？」

「それは、ライトボウガンです。私はどちらかと言うとガンガン前に出て戦うタイプじゃないですし、後方支援の方が合ってる気がしますから」

昨日の狩りを見てラグナは、接近でも通用すると思うんだけどな、あのフットワークの良さは正直驚いたし。だがリーナは女性だ。ラグナは差別する気はない。女性ハンターが活躍しているのは知ってるし、男のハンターとまた違った強みもある。だか接近となるとやはり潜在的な体力の差は否めない。なのでリーナがガンナーになりたいと言うならラグナは賛成だった。PTにガンナーがいれば狩りの幅が大幅に広がるからだ。

「じゃあリーナはガンナーで。早速ガンナーとしての装備を整えよう。いつまでもチェーンシリーズじゃ格好がつかない。もちろん俺もだけど」

「はいっ!!」

リーナは嬉しそうに返事した。

「じゃ武器工房にいこうか」

工房でリーナはクロスボウガンを製作してもらった。

「防具は…とりあえずHR1だから大したものには造れない。しばらくは素材集めとHR上げに専念しよう」

再び酒場。

「とりあえず、リーナはガンナーに慣れないとな。練習がてらに狩りに行こう」

「何のクエスト受注します?」

「緊急クエストあるじゃん!!これ行こう ランポスの群れが大量発生、ドスランポスと見られるモンスターも確認。だつてさ」

(ちよっ!!練習がてらのクエストじゃないって!!あゝもう!!ラグナはやっぱりどこかズレてるよ) リーナの心の叫び。

「ドスランポスですか…」

「ドスランポスはおれが引き受ける。リーナはランポスの駆除、及

び後方からの支援、援護を頼むね」

「や、やってみます」

ラグナ達は準備を整えてクエストに向かった。

町を出て竜車に揺られ一時間。密林に到着した。

竜車での移動中でラグナはリーナにライトボウガンの使用についての注意点を話していた。

「基本的な事はわかる？」

リーナは頷いた。

「じゃあ注意点っていうか、復習も兼ねて話すね？射撃して弾切れして装填する弾薬がなかったら接近攻撃しか使えないから、そう言った時は逃げ回るか、隠れてね？その間に合成して弾薬を作ってもいいし。次に射撃武器はターゲットの飛距離で与えるダメージが違ってくるから、遠すぎたら当然ダメージは少ないし、逆に近すぎてもダメージ効率は悪いから。適正な距離を保つこと。次に一発のダメージは小さいこと。なので単独での狩りは地道にコツコツと、PTでの時はモンスターの足を集中して狙って転倒させたり、状態異常弾で麻痺させたり、眠らせたり、毒状態にさせたり、サポートだけじゃなく様々な攻撃ができる。まあ単独の時、小型モンスターは問題ないけど、大型モンスターは気を付けてって事。次にガンナーは基本相手の攻撃は回避。ガード性能はないからしたとしてもあまり意味はないから。リーナは身軽だし動きも速いから向いてるね。こんなところかな」

「う、うん。わかったよ。ありがと…（やっぱりよくほとんど知らなかった！聞いてなかったら迷惑かけるところだった…超遠距離からの狙撃とか…聞いててよかった）」

キャンプについて支給品を取り出して。最終確認。

「ドスランポスを討伐すれば、周りのランポス達は混乱して逃げるから普通ならここでクエスト完了だけど、緊急クエストはドスランポスも周りのランポスも倒さないとダメだから、ドスランポスを倒してもランポスは逃がさない。その時は支給用閃光玉投げてね。ランポスの視力が回復する前に倒すから」

「…（コクコク）」

少し緊張してるみたいだ。

それを感じ取ったラグナは、

「リーナが危なくなったら助けるから」

突然そんなことを言われたリーナは恥ずかしかった。不安だったのが表情に出てた事が恥ずかしいのではなく、それをわかった上で助けると言ってくれた事が嬉しく、恥ずかしかった。

「うん ありがとう。行こうッ！」

「おっ」

二人は戦いに赴いた。

第六話 憧れのガンナー（後書き）

どうも！！江久世蓮人です。第4話の後書きで募集している【第三の人物】多数の方からの募集が来ています！！嬉しくて倒立したら背中から倒れて3秒ぐらい息できませんでした。第三の人物として採用するのは1人だけですが、登場人物として、敵役、ライバル役、鍛冶屋のオヤジなどでの採用も考えてます。貴重な意見を無駄にはしません！！引き続き募集はしますが、早めに切り上げることもあるかもです。これからも応援よろしくお願いします。

第七話 努力の天才と天賦の才（前書き）

どうも！！江久世蓮人です。やっとここさ戦闘シーンですやっぱり自分の文章力の無さを痛感する羽目に。でも頑張ります！でわ第七話 努力の天才と天賦の才 どぞ。

第七話 努力の天才と天賦の才

海辺に面した場所にあるキャンプを出たラグナとリーナ。

「今回は密林に直接はいらず海辺から行こう」

ラグナの指示により、それに頷くリーナ。

しばらく海辺を進むと早速三体のランポスを発見した。

すぐさま二人は臨戦体制に入り、リーナはLV2通常弾を装填した。

「リーナ。ガンナーとしての初陣だ。華々しくデビューなよ」

「が、頑張る…」

するとランポス達もこちらに気付いた。

ギヤアアツギヤアアツと威嚇し近付いてくる。

そのうちの一体がリーナの間合いに入ってきた。

「ダンッ ダンッ」

一発目は胴体に当たり、二発目は首元に当たった。

ギヤアアツとランポスは声上げ一瞬怯んだが、体制を整え、怒りを露にして突っ込んでくる。

リーナはお構いなしに続けて三発食らわせる。そのうちの2発が頭部に当たり、息の根を止めた。しかし他の二体も黙ってはいない。

一体はリーナに飛び掛かり、もう一体はリーナの左側から噛み付こうとしている。瞬時にリーナは右側に側転しLV2散弾を装填、未

だに反応出来ていない二体に散弾をお見舞いする。

「ダンッ　　ダンッ」

ランポスが怯んだ隙に素早く装填し、続けざまに二発食らわせる。吹き飛んだランポス。バックスステップで今日を取り、LV2通常弾を装填、起き上がった時にランポスが聞いた最後の音、

「ダンッ　　ダンッ」

撃った弾は吸い込まれるようにランポスの頭部に撃ち込まれた。

リーナがボウガンを肩に担いでラグナの元に戻る。

「ど、どうかな…?」

ラグナは驚いて声が出なかった。

「ラ、ラグナ?」

「あ…ああ…すごいっていうか何て言うか…ほんとにガンナー初めて?」

ムツとした表情でリーナは言い返す。

「何で嘘つく必要があるの?初めてで緊張したんだから!!」

確かにそうだな。とラグナは考えた。でも初めてにしては凄すぎる。撃つていく毎に正確になる命中率、完璧な装填のタイミング、接近されたときの動きと、弾薬の使い分け。一連の動きがスムーズで一

切の無駄がなく、熟練したハンターの動きのようだった。

「ごめんごめん！！動きは完璧だった。惚れ惚れするくらいに」

「そっか ありがと。上手くできるか心配だったけどよかった」

ラグナはこの時思った。リーナには天賦の才があると。常人には無い、天が与えた唯一無二の才能。瞬く間にその状況下に対応する順応性、成長スピード。適応力。昨日の狩りの時にもその片鱗は見せていた。

「上等。俺も負けてられねえ」

ラグナは不敵に笑い、そう言い放った。自分自身に。

狩ったランポスの剥ぎ取りを終えると二人は更に奥へと足を進める。

海辺に面して少し段差のある高台がある場所に出た。

ブルファンゴが二体、ランポスが4体。ランポスは遠くにいるのでこちらに気付く気配はない。

「まずはブルファンゴ二体。リーナ、一体任せて大丈夫？」

「もちろん」

リーナはLV2通常弾を装填する。

そんな2人の気配を感じたのか、ブルファンゴはこちらに向き、鼻息が荒くなり後ろ足を地面を力強く蹴り突進してきた。

最初の一体はリーナに向かってきた。

リーナは狙いを定め、

「ダンッ　　ダンッ」

ブルファンゴに当たりはしたが、ブルファンゴは止まらない。

「ダンッ」

もう一発撃つがやはりブルファンゴは止まらない。

リーナとブルファンゴの距離は１メートルも無いぐらいに迫っていた。

リーナは軽く舌打ちして左に回避した。ギリギリ避けれたようだ。

振り返りながら散弾を装填し、目標を見失ったブルファンゴがゆっくり振り返えろうとしていた。しかしリーナはそれを待ってるほどバカじゃない。

「ダンッ　　ダンッ」

ブルファンゴに散弾を浴びせる。

ブルファンゴは振り返えることなく力尽きた。

「やるねえ〜。けど負けねえ!!」

「ええっ!?! なんの勝負!?!」

リーナは驚く。

「俺が勝手に決めた!!」

さっきの戦闘でランポスもこちらに気付いた。
ギヤアアツギヤアアツと鳴き声をあげる。
まだ遠くにいるので一先ずはブルファンゴだ。
今度はラグナの方に向かってきた。

「ランポスもこっちに気付いたし時間掛けられねえな……。アレやるか」

するとラグナは抜刀し、溜め斬りの体勢に入り、意識を集中して、何故か目を瞑った。

ドスランポスは凄いスピードで迫ってくる。

リーナもラグナが何をしようとしているか分かっていた。大剣の特技である溜め斬り。多くの大剣使いを魅了する爽快感120%の大剣特有の技だ。しかし、

「ラグナー！！何で目なんて瞑る必要があるのよ！！」

リーナが声を荒げてツツコミを入れる。

しかしこの瞬間ラグナにはブルファンゴ以外の存在は無に等しかった。

もうすでにブルファンゴはラグナの目の前だ。

「（今から撃つても間に合わない！！やられる！！）」

その瞬間

「ハアアアアアツツ！！」

神速のスピードでラグナの大剣は降り下ろされた。

ザンツッ！！　ブシュツッ！と音がして、ラグナの大剣は地面に突き刺さる。

ブルファンゴは頭から血を噴き出し地面に転がり。ピクリともしなかつた。

リーナは口を開けてぽかんとしている。

「凄い…」

「リーナ？面白い顔してないでランポス倒すぞ」

リーナは慌てて体勢を整える。

「お、面白くなってヒドい！！」

緊張感の無い二人。だかこのあとランポスを難なく倒して、リーナが口を開く。

「どづしてあの時、目を瞑ったの？」

「それは、リーナがキスしてくれるかな…って思って」

「えっ…。なあツッ！！あ、あんな状況じゃで、できないですよ！？ちがッ！しないわよ！！」

顔を真っ赤に染めパニくってるリーナ。

「ぶっ！！分かってるって 冗談。あれはね、」

そういつて静かにラグナは語り出した。

第七話 努力の天才と天賦の才（後書き）

どうも！！江久世蓮人です。なんか最後引つ張る形にしてすいませんー！！あそこがちょうど線引きにはいいかなと思ひ…すいませんー！！やっぱり戦闘シーン苦手です。これからも応援よろしくお願いします。

第八話 決着！！ドスランポス

あれは俺が12才の時だ。親父であるバカ（師匠）が、

「ラグナ！！今日は目隠ししてブルファンゴを倒せ！」

って言ってきたやつだ。ふざけんなって思って言ってやった。言ってやったさ。

「このバカ親父！！ふざけんじゃねえ。目隠しだあ！？何考えてやがんだ！！そんなアブノーマルな趣味俺はねえよ！！エロ親父が！！」

ラグナもバカである。

「バカ者お！！目隠しは最高だ！！視覚が遮られて他の感覚が研ぎ澄まされた時のあの快感！！って違う！！この応用の仕方はまだお前には早い！今回は大剣の奥義と言われる溜め斬り！！その技での応用だ！！」

「このバカ親父が！！前半のはなんとなく分かるが応用なんてしねえよ！！どちらかと言うと目隠しはさせた方が楽しめる！！って違う！！ふう。で、大剣の溜め斬りの応用？なにそれ？」

ここでハッキリした事がある。師〃M、弟子〃S　という定義だ。作者もバカですいません。

「ふむ。なるほど。ラグナは俺とは逆か…。おっと。溜め斬りは分

かるだろう？その技を直線的な攻撃しか出来ないブルファンゴで練習するんだ」

「いやいや。それはわかってるよ。目隠しの意味がわからないんだって」

ここで師匠が殺し文句。

「バカ者オー！！そんなことも出来なきゃハンターなんぞなれるか！！」

「なっ！！！！そうなのか…。ハンターってそんな険しい道程を越えなきゃいけないんだな。知らなかった…」

「それにだ」

「それに？」

師であるセネルはニヤリとして言った。

「かつこよくねえか？」

ラグナはしばらく考える。普通の人間なら、危ないからとか、見た方が確実とかいうセリフを吐くのだろう。しかしラグナは、

「うおおおッ！！めっちゃかつこいいじゃん！！俺頑張る！」

バカなのだ。

そんな経験もありラグナは、スキル『盲殺溜め斬り』を体得した。

「そんなことがあって、俺は目を瞑ったわけだ。かっこよかった！？」

ニコニコと笑顔で聞いたラグナ。

リーナは世の中にこんなバカな親子がいるのかと思ったが、そんな言葉が出るはずもなく、

「う、うん！ものすごくかっこよかったと思うよ！？」

若干言葉を濁したが、ラグナは満足そうだ。

「よし 剥ぎ取りして進もうぜ」

上機嫌であった。

密林を進んで、洞窟の入り口にきた。

「入ってみるか リーナ、入るぜ」

未だ上機嫌なラグナ。リーナもそれがわかってなんだか嬉しかった。

「うん」

洞窟の中に入ってみるとかなり広かった。そして、ランポスがいた。そして、

「ギヤアアツ！！ギヤアアツ！！」

ドスランポスもだ。

二人の表情も脳内も一気に戦闘モードに切り替わる。
ランポス8体、ドスランポス1体の群れだった。

「リーナ！！俺の援護はいい！！後方からの狙撃でランポスを足止め、駆除を頼む」

「はいっ！」

ラグナが指示を飛ばす。

ドスランポス達もすでに臨戦体勢だ。

ギヤアアッギヤアアッ！！とドスランポスが指示を出したのか、ランポス達が突っ込んでくるラグナに襲い掛かる。

一体のランポスがラグナに噛み付こうとする。
その時

「バンッ バンッ」

ランポスの胴体に着弾しランポスが怯んだ。
その隙をラグナが一閃。

「うらあッ！！」

ザシュ！音がしてランポスは吹き飛ばし一体目。

リーナの存在を邪魔に思ったのか、ラグナに向かっていたランポス

の内の三体がリーナをターゲットに変更した。三体のランポスがリーナに方向転換すると、リーナはLV2散弾を装填した。ランポスがリーナの間合いに入る少し前に散弾を撃つ。

「ダンッ　　ダンッ」

ランポスが怯んだ隙にリロード。

「ガチャッ！ダンッ　　ダンッ」

再びランポスが怯む。リーナはリロードし、撃つ。ランポス三体はリーナに近付くことも出来ずに沈黙した。

ランポスが殺られた事にドスランポスは怒りの声をあげた。そして目の前にいるランポスを押し退けてラグナに襲い掛かる。ドスランポスは鋭利な爪でラグナを斬りつけた。

「ガキイン！！」

ラグナは大剣の腹の部分でガードし、そのままなぎ払い、距離をとる。

ランポスが右側から飛びかかってきた。

「チッ！！」

ラグナは舌打ちして一瞬で考える。迎撃するか回避するか。どちらにしても隙が出来てドスランポスの攻撃の格好の的になる。それなら！！

「オラアアツ！！」

向かってきたランポスに大剣を斬り上げ、腹部から首元にかけてぶつた斬った。血を撒き散らしながら空を飛ぶランポス。

ドシヤツ！！と音と共にランポスは力尽きた。

ドスランポスはやはりラグナの攻撃後の隙を突いてきた。

「チィッ！！（ガードも間に合わねえか…こうなったら衝撃だけでも和らげなくちゃなツ！！）」

「ダンッ　　ダンッ　　ダンッ」

「ギヤアアツ？」

リーナがドスランポスにL V 2通常弾を撃ち込んでいた。ドスランポスもたまらず怯んだ。

「リーナ！！助かった」

そう言うとラグナは斬り上げからの体勢から身体を捻り、怯んだドスランポスに縦斬りを繰り返す。

ザシユツ！！

音と共にドスランポスの胴体から鮮血が噴き出した。

ドスランポスは距離を取り威嚇している。

ラグナはポーチからペイントボールを出し、ドスランポスに投げつけた。

「べちやー！！」

「逃げでもしたらめんどうだからな」

「ギヤアアツ!!!」

とドスランポスが鳴き声をあげた。

ラグナとリーナ、残るランポス3体は固まった。

ラグナが投げたペイントボールがドスランポスの頭に当たりペイントが目に入ったようだ……。痛そうに苦しんでいる。

目に異物が入ったときの痛みはモンスターも人間も共通のようだ。ランポス達も困惑している。

おもわぬ隙が出来、ラグナが叫ぶ。

「リーナ!!!今だ!!!閃光玉を!」

リーナはすぐに反応し閃光玉を投げた。

「『『『ギヤアア』』』」

ドスランポス達は視界を奪われた。

「今のうちにランポスを!!!」

「はいっ!」

無抵抗でフラフラしているランポスにリーナはLV2通常弾を撃ち込んで仕留め、ラグナもランポスを斬りつける。

「リーナ!!!もう一体は任せた!!!」

リーナは頷き、ランポスに止めをさした。

まだ視界を回復しきれていないドスランポスに向かって疾走するラグナ。リーナが最後のランポスを倒すのを確認すると指示を出す。

「リーナ！！麻痺弾を装填出来次第ドスランポスに撃ち込んでくれ」

「はいっ！………ガチャーン！撃ちます！！」

ラグナはドスランポスをリーナと挟むように側面に移動し斬りつける。

「ダンッ ダンッ」

「ザンッ！！」

ギヤアアッ！！ラグナが斬りつけると同時にドスランポス吹き飛んだ。

しかしまだ余力があるか、ドスランポスは起き上がる。ラグナ達に背を向け逃げようとしていた。

「ダンッ」

しかしリーナの放った銃声でドスランポスの動きが止まった。痙攣しているかの様にビクビクと小刻みに震え、抵抗している。

「終わりだあッ！！」

ラグナはドスランポスを斬りつけた。

ドスランポスがギイイッ…と鳴き、ドシンッと倒れ、ドスランポス

は力尽きた。

「ふう。リーナ……お疲れ……!!」

「お疲れ様です」

お互い笑顔で言葉を交わした。

「さあ……剥ぎ剥ぎしようぜ」

「はい」

剥ぎ取りを終えて。ラグナ達は町に帰っていった。

第八話 決着！！ドスランポス（後書き）

どうも！！江久世蓮人です。どうでしたでしょうか第八話！！今回は戦闘シーン頑張りました！！まだ2回しかクエスト行っていないですが…。感想頂けると嬉しいですはい。引き続き【第三の人物】募集です。ラグナの仲間になるキャラです。出所満載です。そんなキャラクターを作るのはあなたかもすれない！！あっ！！かつこいいこと言いながら噛んじやったよ！てな感じで応募、応援よろしくお願いします。でわ。

第九話 真実とラグナの愚行（前書き）

どうも！！江久世蓮人です。ドスランポスを倒し、帰宅して明らかになる真実！！でわ、第九話 真実とラグナの愚行 どぞ。

第九話 真実とラグナの愚行

日が暮れて、酒場が賑わい始める頃に、ラグナ達は帰ってきた。討伐した証拠となる部位を受付嬢に渡す。

「はあ〜い。お疲れ様です。確かにドスランポスの討伐部位です。確認しました〜。こちらが報酬になります。」

報酬を受けとる。緊急クエストの場合、通常のクエストと違って報酬が多いのだ。その分危険も増えるが。

ラグナが礼を言って踵をかえすと、受付嬢が、

「あつ、ラグナ様とリーナ様。すみませんがギルドカードの提示よろしいですか？」

ラグナとリーナは頷いてギルドカードを渡した。

「……………はい。これで完了です。お一方はHR2に昇格しました。おめでと〜ございます」

ラグナとリーナは顔を向け合い。

「やったな!!!リーナ」

「きゃ〜上がった」

と喜んでいる。

そんな嬉しいことがある日は当然、

「カンパ〜イ！」

ドスランポス討伐とHRの昇格を祝って二人で飲んでいる。

「リーナはビールは5杯までな！それ以上は飲まさないから」

「ええ〜。そんな〜……………はい。わかった…」

昨日の事がある。リーナは渋々認めた。

「それにしてもお互い怪我もなくてよかったな」

2人は今回の狩りで無傷だった。

「それで、憧れのガンナーになった感想は？」

「一発一発の威力は低いけど使いようですね。ランクが低いガンなんでブレ幅も大きいけど、慣れれば抑えられますから。今日でだいぶ慣れました」

ラグナから見ても、リーナはほぼ完璧にボウガンを使いこなしていた。

「だな。防具も整えたいし、明日は鉱石とか素材集めに行こうか」

食事を済ませ、会計を済まして2人は席を立つ。

「あつ。これリーナの分の報酬な！！じゃあ帰るか」

リーナに報酬を渡す。
するとリーナが、

「ちょっと武器工房によっていいです？」

「ん？いいけど。どうしたんだ？」

「ランポスの素材もあるし、ショットボウガン【碧】を作ってもらおうと思って。小型モンスターなら散弾が有効で、散弾の装填数が多くなってるし、麻痺弾も装填数が多くなってるから作るうかなって」

「なるほど…いいな…新しい武器…」

ラグナはちょっと羨ましかった。

工房で新しいガンを作ってもらい上機嫌なリーナ、それを羨ましげに見るラグナは、俺も次はカッコいい武器作ってやる！！と心の中で叫んだ。

「じゃあ帰りましょう」

「おう。だな」

リーナは家とは反対方向に歩き出す。
ラグナは3秒ほど見て、

「リーナ？どこいくんだ？」

「リーナ？起きたのか。いきなり倒れてびっくりしたぜ」

リーナは先ほどの事を思い出したのか、また顔を赤くする。

「あつ、えつと、いや…その」

「まだ顔が赤いな？酔いが抜けてないんだな。ほら水飲むか？」

「あ、うん…ありがとう（うわあ〜ラグナって超鈍感だよ…でも鈍感のくせに大胆なんて最悪の女キラーだよ…顔は美形だし。鈍感＋天然×美形＝始末に負えない女たらしじゃん！！）」

「全く。そこまで酒に弱いとハンター失格だぞ？これからは酒に強くなるために鍛えるからな！！」

「…はい？…いやッ！！ハンターとお酒の強さは関係無いからね！？別にお酒強くなる必要なんてないんだからね！？」

「あはは な〜に言ってるんだよ？お酒が強くないとハンターにはなれないんだぜ？師匠が教えてくれたことだ、間違いはない」

「それは…（あんたらバカ師弟が間違ってるから！！酒が飲めないハンターはたくさんいるし、強さと比例もしないから！！…）と言いたいけどその言葉を純粹に信じているラグナに…リーナは言えそうになかった。…）…うう…わかった…頑張るう…」

リーナは泣きながら諦めた。

「そろそろ風呂沸いたからリーナ先に入れよ」

「いやいや！一番風呂を貰うわけにはいかないよー！」

「はあ？男の入った後の湯槽なんて嫌だろ？」

嫌だけどラグナの後なら別に嫌じゃない…けど…ここはお言葉に甘えた方がいいと思っただりーナ。

「じゃあお先にお風呂いただくね」

「ああ。ごゆっくり」

パタパタと風呂場に向かうりーナ。

「さて俺も防具脱いでくつろごう」

部屋に戻り、防具を脱いで汚れを落とす。ラグナは綺麗好きだったふと、ベットの横にある腰ぐらいの高さの小さい二段のダンスがあった。

「そついやこれ何が入ってるんだ？最初からあつたけど…」

ラグナは一段目を開けてみた。そこには、

「んなつ！？」

R18指定間違いない本がズラリと敷き詰めてあった。

「あのバカ親父！！こんなもん残しやがって！！こんなもん捨ててや…いや、後学の為に置いておこう。うん」

ラグナも健全な15才だ。当然の選択である。

「二段目は何が？まさかまた！？」

若干ワクワクしながら二段目を開ける。そこには、

「んなっ！？」

そこには一面に敷き詰めてられた、タバコ。と一枚の封筒。

「タバコ…？それはいいとして、なんだこの封筒」

ラグナは封筒を手に取り、中から一枚の紙を取り出し、読み始める。そこには、

『ようラグナ！！これを読んでるって事はお前がハンターになったって事だろう。家の住み心地はどうだ？なかなかいいだろう！女なんか連れ込んでたらぶっ飛ばす。お前だけなんてずるいからな！！話がずれたな、手短に言おう。俺は死んでない。実はお前がハンターになる為ドンドルマに出発した夜。俺はギルドから極秘の任務を受けてだ、内容はすまん。言えん。とにかく姿を眩まさにやいかんかった。何も言わずに姿を消した事は悪いと思ってる。すまなかった。俺もお前もハンターだ。どこかで会うかもしれない。もう会えないかもしれない。だが、俺とお前は絆で繋がっている。親子として師弟として。また逢う日を楽しみにしている。でわな。』

PS 例の本は俺の宝物だ。お前にやる。有効利用しろよ？

タバコも15才から吸えるんだ。お前の事だから、身体がどーのこ

「の言うんだろ。けどな、タバコ吸う男って、かつこよくねえか？
まあ判断はお前に任す。
強くなれよ。
じゃあな。」

ラグナはフルフルと震えている。

「あ、あんのおーバカ親父がああッ！……！」

この一言があの手紙に対する返答だ。

「ふう……」

落ち着いたのか、ラグナは真剣な顔付きになり一冊の本を取り出す。

「って、これじゃねえ！！！」

本を名残惜しそうに元の位置に戻し、二段目からタバコを一箱取り出した。

火をつけて息を吸い込み煙を肺に入れる。

「まずう……けど、良いもんかもな」

親であり師であるセネルがいつも吸っていたタバコ。少し懐かしい臭いが心地好かった。

リビングに戻り、リーナがまだ上がってないことを確認した。

「女の子は長風呂っていつからな…ん？リーナタオルも着替えも持っていないじゃね？」

タオルを持って風呂場に行き、扉を開ける。そこにまっ裸でオロオロしているリーナ。リーナ振り返り、お互い目が合い、フリーズ。

「ッ、キヤアアアッ」

「うわッ！？すまんリーナ！！」

まさか上がつてるとは思ってたラグナは、慌てて扉を閉める。

「キヤアアアッ！！何で出ていかないで扉を閉めるのよ！！」

身を抱えるようにしてしゃがむリーナが叫んだ。つまり密室に2人きりなのだ。

ラグナは気が動転してそんな奇行を取っていた。

「ごごむん！！タオ起きとく！！」

訳

「ごめん！！タオル置いとく！！」

ラグナはタオルを置き、慌てて風呂場から出た。

しばらくして顔を真っ赤にしタオルで身を包んだリーナが風呂場出てきて部屋に戻った。

「ハアア…。。さすがに怒ってるよな…謝ろっ」

リーナの部屋をノックする。

コンコンッ。

「リーナ？入っていい、かな？」

「……………」

返事はない。

「お〜い。リーナ？話したい事があるんだけど〜ダメかな？」

「……………入って」

部屋に入るとリーナは服に着替えていて、ベットの上で体操座りしていた。

リーナは開口一番に、

「……………見た？」

ラグナは、

「ばつちり隅々まで！！」

グッと親指を立てて言い放った。バカだ。

リーナはカア〜と顔を紅くし、枕や目覚まし時計やスタンド式照明などを投げつけ、

「こんの…出てけバカっ！！変態！！鈍感！！天然！！」

ラグナは一目散に部屋から出た。
このあと3時間、ラグナは部屋の前で謝り続けた。

第九話 真実とラゲナの愚行（後書き）

どうも！！江久世蓮人です。いや〜今回第九話だけで3時間は軽く消費しました。シリアスにしようとしても、書いていくうちにボケに走る自分が憎いです！！楽しんでいただけの方！！疑問に感じた方！！感想待ってます 【第三の人物】も好評受付中です！！これから応援よろしくお願いします！！

第十話 互いの気持ち（前書き）

どうも！！江久世蓮人です。今回は第十話です。十話！！やっと二桁になりました。なので記念に下ネタにチャレンジしました！！そこでふと疑問が、下ネタってR指定いるんだろうか……。というかきちんと下ネタになってるかも不安になってきました……。読まれた方でR指定した方が良いとか、もしくはこんなもんだったら平気とか分らないんで良かったら教えてください！！でわ第十話 互いの気持ち どぞ。

第十話 互いの気持ち

「起きるニヤ〜起きるニヤ〜朝だニヤ〜。」

五分後。

「起きるニヤ〜起きるニヤ〜朝だバシツ!!!」

スヌーズ機能がついていたようだ。現在の時刻は五時五分。昨日の夜、怒ったリーナを宥めて、何とか許してもらったが、その頃にはもう日が変わっていたのだ。その為ラグナは寝不足だ。しかしラグナは生活リズムは変えない。

いつも通り顔を洗い、歯を磨く。準備体操の後、筋トレをし、シャワーを浴びた。シャワー浴びて風呂場から出て、髪から水が滴る。タオルで髪を拭いていると、

「ガチャッ」

「ガチャッ?」

ラグナが振り返るとそこには、

「……………」

「……………おはよ」 ラグナ

「……………ボタン!」

リーナは一言も発つさず、二度寝した。

「はぁ……」

ラグナは溜め息をつきながら服をきてリーナをリビングに運んだ。

しばらくしてリーナは目を覚ます。

「よっ。おはよ」

「……おはよう……」

目の前にラグナがいて気まづくなり、目を逸らすリーナ。

「リーナ。こんなの聞くもんじゃないけど……見た？」

「……………（コク）」

「はぁ……どつまで？」

リーナは答えるのが恥ずかしいのか、答えない。

「気にしないでいいぜ？俺は男なんだし。裸ぐらいどつってことないから」

ラグナは努めて明るく答える。

リーナも少し楽になったのか顔を上げて頷いた。

「リーナも見たし、これでお互い様だな」

するとリーナは昨日の事を思い出し、

「ラグナのウルサーP38と私の身体と一緒にするなあー!!」

ウルサーP38とわ、某有名アニメ、ルン三世が使う愛銃である。分かりやすく言えば古いタイプのハンドガンだ。小型の。時代錯誤してますが、以下略。

「んなっ!?!?」

リーナの口撃がクリティカルヒット。ラグナはショックで力尽きた。効果は抜群だ。

男性読者なら、女性に言われたくない言葉ワースト3に入るだろう。

その後、二人は酒場で朝食を済ませ、クエストに向かった。

今日は密林素材ツアーのクエストだ。危険なモンスターも居ないため、採取、発掘には最適したクエストだ。キャンプに到着しても、ラグナはまだ朝言われた事を引きずっていた。

「もぉ〜!言い過ぎたって謝ってるんだから許してよぉ?」

「いや、大丈夫だから。気にしてない」

そうは言っても、ラグナの表情は暗かった。

「じゃ、二手に別れようか?俺は鉱石担当、リーナは採取担当で。」

昼位に合流でいい？」

「うん。わかった。じゃ、お昼頃にまたね」

ラグナとリーナは別れた。

「さあ。行こうか？息子よ」

意味不明な掛け声と共に、ラグナは先に進む。

「密林は確か発掘出来るポイントは五箇所だな」

ラグナはしばらく歩き、一ヶ所目に来た。目の前には切り立った崖があり、ジャンプしたら登って上に行けるようだ。周りにはアプトノスの親子が草を食べている。

「さて、氣い取り直して、掘り掘りするか!!」

ラグナが発掘に取り掛かったその頃。

リーナはキャンプから海辺の通りを、考え事をしながら歩いていた。

「言い過ぎたよね…はあ。嫌われたかなあ、私…。PT解散とかされたらどうしよう…そうになったら出ていかなきゃだし…。はあ」

被害妄想に陥っていたリーナ。

「なんであんな事言ったの私!? ああ!!」

頭を抱えジタバタしている。

「でも良い身体してたよね〜ラグナって。割れた腹筋に引き締まったウエスト、胸板も厚くて、肩筋から上腕二等筋が程よく発達してる二の腕。ハア〜」

ジタバタしてるかと思えば今度は顔を火照らせてウツトリしていた。

端から見たら危険人物だ。

ここで新たな真実が！！

リーナは、筋肉フェチだった。

採取の事なんてもう頭になく、妄想モードに突入した。正気に戻った時は一時間後の事だった。

場面は戻ってラグナは。

二ヶ所目を終えて三ヶ所目に移動中だ。

洞窟の中に入る。前回ドスランポスと戦った場所だ。今回はランポスの代わりにカンタロスが5匹ほどいた。発掘中に邪魔されたら面倒なので先に倒しておく。

面倒なので早送り。

「グシャッ！！」×5

カンタロスを倒したラグナは発掘ポイントに向かって歩く。ピッケルを振りかざし、そこでふとリーナの事が頭に浮かんだ。

（リーナって綺麗な身体してるよね〜。肌なんか真っ白でさ〜。出るとこも出てるし〜顔も今さらだけど可愛いよね〜あの漆黒の瞳も

見てたら吸い込まれそうな魅力があるし、あの幼い顔つきと身体とギャップもグツ！とくるしな〜)

ラグナはピッケルを振りかざしたまま、気持ちの悪い顔つきで止まっている。

誰かに見られていたら間違いなく通報されている。

ようやく我にかえたのか、

「って俺は何考えてんだよ！！何でリーナの事考えてんだ？あ〜訳わかんねえ！！」

頭をワシャワシャかいて発掘に再度取り掛かる。

リーナは自分の気持ちに気付き、その感情を育てている。ラグナは鈍感故に自分の気付きにはまだ気が付いてない。

どうやら二人の恋は前途多難のようだ。

昼前にラグナは発掘が終わり、キャンプに戻った。

リーナも終わったのかキャンプで待機していた。

「お疲れ〜。リーナ。集まった？」

「ラグナもお疲れ様 かなり集まったよ」

お互いに戦果を見せ合い。互いに誉めあった。

「じゃあ帰ろう！〜」

二人のはドンドルマに帰った。

ドンドルマの町に着くと、時刻は13時過ぎだ。一先ずクエスト報告。

特産キノコを5個納品して報酬をもらおう。

「やっぱり少ないな。400ゼニーか。リーナ！はい」

リーナは半分の報酬を受け取った。

「しょうがないよ 採取クエストなんだし、危険も少ないしね」

最初のクエストの報酬が2000ゼニー。ドスランポスの報酬が緊急クエストの為割高の5000ゼニー。今のクエストで400ゼニー。

「地道に討伐クエストするしかないのか…はあ」

「あるには…あるよ」

リーナが某アニメの忍者の卵のように目を¥マークにして言った。
¥ ¥

「そ、そんな方法あるのか！？ギルド強盗とかか！？」

「何よギルド強盗って？聞いた事ないよ？」

「俺もない。で、そんな方法あるんだな！？」

(自分で言っといてないのかよ!?)
リーナは心の中で突っ込みを入れた。

「まあね　まずは何か食べようお腹空いちゃった」

「だな　腹が減っては嘗み出来ぬ。って言うもんな」

リーナは華麗にスルーした。

昼御飯も終わり、会計を済ます。

「じゃあ明日の朝からにして、今日は帰ろう　帰ったら何をするか話すから」

二人は少し早い家路につく。

第十話 互いの気持ち（後書き）

どうも！！江久世蓮人です。引き続き、感想、第三の人物、何でも受け付けます。応援よろしくお願いします。

第十一話 金策 黄金魚（前書き）

今回は黄金魚編パート1です。今回ほのぼの系で短めです。すいません。でわ第十一話 金策 黄金魚 どぞ。

第十一話 金策 黄金魚

ラグナとリーナはまだ早い家に戻ってきた。

二人は防具を脱ぎ、私服に着替えリビングに集まった。

「それでいったい何なんだよ、稼げる方法って」

リーナは棒を持っているかのように振りかざし、振り下ろすジェスチャーをしながら、

「レッツ！フィッシング」

と言って説明を始めた。

「密林にね、黄金魚っていう魚がいるのよ その魚はギルドの精算項目に指定されてて、一匹なんと500ゼニーで買い取りしてくれるの！」

「おお！！つまりその黄金魚を釣って稼ぐんだな？」

「その通りよ！でも黄金魚は一人につき10匹しか精算してもらえないし、それ以上の釣果はギルドにバレたら罰則があるから。それと黄金魚は他の魚と違って釣り上げるタイミングが難しいから、長丁場は覚悟しておいてね」

ラグナの目が¥マークになっている。

「一匹500ゼニーで一人10匹の2人だから、10000ゼニー

か！」

「……ふはは！リーナ、お主も悪よのう」

「……いえいえ、ラグナに比べたら私など」

ベタな展開を繰り広げる二人。

そこでラグナはあることに気付いた。

「あ、釣竿ないわ」

「あ、私もない」

二人は晩御飯の材料の食材、それと釣竿と餌を買いに市場にやって来た。

「なあリーナ。リーナは料理は出来るか？」

突然ラグナに聞かれ、慌てたリーナ。

「ふえッ？もちろん出来るよ」

「おっ！まぢ？じゃあこれからは出来るだけ自炊しよう。まだお互い駆け出しのハンターだしな！ずっと酒場で済ましてたら金が尽きるし。一週間交代で。明日から週が変わるから俺がその週するから、今日はリーナな。」

「うん、分かった。がんばるね！」

八百屋で食材を買い、二人は道具屋に向かった。

「いらっしやい！にいちちゃん。可愛い彼女連れてデートかい？」

道具屋のおっちゃんがりんごのような果物を食べながら聞いてくる。

「いや、彼女じゃないですから。釣竿ってあるかな」

リーナが少し残念そうに俯く。

「ハハツ！そんなこと言っていると女の子に逃げられちゃうぜ？ええと、釣竿なら今良い掘り出し物入手したんだ！古龍ヤマツカミの素材から作った逸品だ。これを使えばカジキマグロだろうが黄金魚だろうがバカ釣れだぜ？今なら何と大特価10000ゼニーだ。どうだいにいちちゃん！」

……10000ゼニーだと？高すぎる。ラグナは聞いてみた。

「普通の釣竿じゃ黄金魚は釣れないのか？」

道具屋のおっちゃんは答えた。

「問題なく釣れる」

「じゃあ、普通の釣竿2つと餌を買つよ」

ラグナは思った。おっちゃん商売向いてないんじゃないかねえかと。そこは嘘でも釣れないって言わなきゃと駄目だろ。

「うんッ！頑張ったもん！さ、食べよっか」

嬉しそうな顔のラグナを見てリーナは安心して微笑んだ。

「ごちそうさま！いやほんとに美味しかった！リーナThank
you」

「そう言われると作った甲斐があったよ。Thank youラグ
ナ」

何で最後英語？とリーナは思ったがリーナは気にしないことにし
た。

その後二人は少し早い寝ることにした。明日の大漁を夢見て。

第十一話 金策 黄金魚（後書き）

少し文法変えました。読みやすくなったと思うんですが。感想などお待ちしています。それと企画していた【第三の人物】今日の24時に締め切ります発表は明日の更新で行います。お楽しみに。

第十二話 釣り対決に迫る影（前書き）

今回は黄金魚編パート2です。第十二話の後書きにて報告があります。ご覧ください！でわ第十二話 釣り対決に迫る影 どぞ。

第十二話 釣り対決に迫る影

トントントントンッ!…ジュワッ…ザー…。

「ううんー!もう朝。何の音だろ?」

リーナはラグナが作る朝食の準備の音で目を覚ました。

「ラグナ?」

リーナはベットから出てリビングに出た。

「おっ。起きたかリーナ」

「うん。ラグナおはよう」

「おはよ。もうすぐ朝飯出来るから顔洗ってるよ」

リーナは頷き洗面所に向かい顔を洗ってリビングに戻った。朝
食が出来上がってラグナの前に座る。

「美味しそう!」

「朝だから軽めに作ったから大したことないって」

朝食を食べ始め、リーナは前から気になっていたことを聞いてみ
た。

「ラグナっていつも朝早いよね？何してるの？」

「ん？別に何って事もないけど朝の鍛練だよ。ハンターだからな。力や体力はつけといて損はない」

確かにそうだとリーナは思っただけで考える。

「じゃあ明日から私も一緒にしていかな？私体力ないしこれからいざって時に役にたたなくて、ラグナに迷惑かけたくないし」

「おう。いいぜ？朝の5時起床だからな。寝坊するなよ？」

「ご、5時？が、がんばるよ」

言ってしまったって少し後悔するリーナだった。

朝食を済ませて酒場に行く準備をして家を出た。

ラグナはブレイズブレイドを、リーナはシヨットボウガン・碧を装備して反対側の肩に釣竿とエサ箱を背負って酒場に向かう。

「はぁーい。おはようございます。今日はどのようなクエストをご希望ですか？」

「密林素材ツアーをお願いします」

「はぁーい。でわそのクエストで登録します。今回は危険なモンスターが必ず出ないとは保証出来ませんのでご注意くださいくださいね」

「ん？どういう事？」

「はぁーい。ギルド気象庁からの連絡で今日から繁殖期に入ったと

の連絡がありまして、各モンスターの活動が活発になるとの事なんです」

「そうか。忠告ありがと」

ラグナ達は特に気にした様子もなくクエストに向かった。後に起こる戦闘など気付くこともなく。

キャンプに到着して二人は早速釣り場に向かった。

「なあリーナ。いい事思いついたんだけど聞くか？」

「フフフツ。あら奇遇ねラグナ。私も思ったの」

二人は息を吸い込み。

「「勝負だ!!」」

「敗者の罰ゲームは勝者の言うことを何でも一つ聞く事。これでどうだ？」

「それでいいわ。望むところよー!」

こうして、

【黄金魚十本勝負 ラグナVSリーナ in密林】が開催された。

開始して、三時間が経過した。スコアは九対八。両者の勝負はほぼ互角でラグナが一匹リードし、王手をかけていた。

ラグナは自信があつた。幼い時から訓練を受けていたからだ。リーナも自信があつた。黄金魚の事を知らなかつたラグナは釣りの経験が浅いと踏んだのだろう。リーナは釣りの経験は豊富ではないがそれなりに腕があつた。だかそれは誤算だつた。

開始10分後、

「よしっ、来た来たあ！一匹目ゲットだぜ」

リーナは驚いた。

「ええっ！（只でさえ釣り上げるタイミングが難しい黄金魚を一発で釣り上げるなんて）……ま、マグレよ！二度は続かないわ」

更に20分後、

「うしっ、もらった！二匹目ゲットだ！」

ラグナはリーナをチラッと見て、フフンと勝ち誇つた顔をする。

「ちょ、ちょっと！話が違つじゃない！ラグナは釣り知らないんじゃないの？」

「ん？俺知らないなんか言つてないぜ？黄金魚が高く売れるのが知らなかつただけ。釣りはバカ親父から訓練受けてたから得意だ。」

あれはそう、俺が11才の時だ」

ラグナはそう言うと語り始めた。

「ラグナ！今日は釣りに行くぞ！」

「うん！行く行く！」

ラグナ少年はこの時まで釣りが大好きだった。そうこの時までには。

ラグナと師であるセネルは釣り場に行き、ラグナもいつものように釣竿を持って準備する。

「おいラグナ。その釣竿は置いて、今日からこれを使い！」

そう言って渡されたのはアイアンソードだ。先端に小さな穴が開いてそこから釣り糸が伸びて先端に釣り針がついている。

「は？何だよこれ。まさかこんなので釣れなんて言うんじゃないよな？」

「ハハハッ！さすが俺の弟子だ。物分かりがいいじゃねえか」

バカじゃないかこいつ？いやバカだけどおかしいだろ？そんなバカ（親父）に言ってやった。

「こんのおバカ親父！こんなクソ重いもんで釣りしたら手が疲れるわ！ヒットしたとしても伝わってくる感触も竿（剣）の反応も少ないだろうが！」

「ハハハッ！さすが俺の弟子。わかってるじゃねえか。それは腕力を鍛え、動体視力を養い、反射神経も素早くなる万能釣竿だ！」

ラグナは呆れる。

「俺は釣りは静かにのんびり楽しみたいんだよ！」

ラグナの意見は最もで正論だ。だがバカ（親父）には通用しない。

「バカ者オーツ！そんな事じゃハンターになるなんて夢のまた夢だ！それにラグナ、この訓練の効果は絶大だぞ？どんな大きな魚にも対応できる腕力、どんな小さな動きも見逃さない動体視力、とっさの食い付きに対応できる反射神経！これを身に付ければラグナの釣りのスキルは格段にアップする！それにだ、釣りの上手い男って、かつこよくねえか？女と釣りに行った時、魚だけじゃなく女も釣れちゃうんだぜ？」

「うおーッ！頑張っちゃうよ俺！」

「そんな事もあって俺は釣りのスキルは達人並ってわけ。どうかっこいい？」

ブチッ！

リーナの中で何かが切れて、追撃モードに切り替わる。

「別に！負けないから！」

「俺も負けねえよ？それにまだリーナは一匹も
「よっしゃー来たぜ！こりゃあダブルかもな！」

リーナは軽く人格崩壊した。なんと釣り針を追加して2つ付けて
いた。

「なッ！そんな方法があったのか！」

ラグナも驚く。

「これで同点！勝負はこれからよ！」

この後、ラグナが釣ればリーナも釣り、勝負は全くの互角だった。

場面は戻って勝負の局面は九対八。ラグナが釣り上げれば十匹で
ラグナの勝ちでリーナもダブルで釣ったらリーナの勝ちだ。

その時ラグナがリーナに声を掛けた。

「なあリーナ。ここは一時休戦しないか？もう昼時だし昼休憩にし
て、続きは午後からって事で。どうだ」

「そうね。一旦休憩にしましょうか、私もお腹空いたし」

リーナは同意し、二人とも釣具を片付けた。

「確か崖を降りた所にアプトノスがいたな。剥ぎ取りして肉焼いて
食おう」

ラグナとリーナは崖を降りてアプトノスを狩り、食事を済ませた。

「ふーッ。食った食った。じゃあ釣り場に戻るか」

ラグナがそう言ったときだ。

バサッ！バサッ！バサッ！ ドスンッ！

……奴は現れた。

第十二話 釣り対決に迫る影（後書き）

どうも。江久世蓮人です。十二話の最後に登場した影はいつたい何なのか！アレですアレ。勘の良い読者様はお分かりでしょうね。普通のクエストで出しても面白くないので、こんな登場にしてみました。話は変わって企画していた【第三の人物】の集計が終了し、選考結果の発表です。今回は！神月ラセ様から頂いたキャラクターに決定しました。その全貌は……お楽しみと言うことで。ちなみに第四のキャラも決まりました。その他の応募して頂いた皆様！応募ありがとうございました。それと期待に添えなくて申しわけありません。登場人物として使用します。

第十三話 先生の授業（前書き）

黄金魚編パート3です。 第十三話 先生の授業 どうぞ。

第十三話 先生の授業

奴は現れた

ピンク色の鱗、ランポスの五倍はあるであろう体躯に、最大の特徴である大きな嘴。

鳥竜種イヤンクツクだ。

「……クツク先生」

ラグナはそう呟いた。

「どうするのラグナ？今はまだあつちは気付いてないけど見つかるのも時間の問題ね……。どうやって逃げる？」

「何から逃げんの？」

ラグナは何から逃げるのかわからなかった。倒す気満々だったからだ。

「何からってイヤンクツクから逃げるに決まってるじゃない！あんな大きな嘴で噛みつかれたら死んじゃうよ？」

「当たらなかつたら良いんだよ？それにリーナは遠距離からだし、イヤンクツクがリーナの方に向いたら攻撃を止めて回避に専念すれば良いから。リーナの素早さなら避けられるよ」

「うーん……ラグナは戦った経験あるの？」

「少ないけどあるよ？あるって言うっても親父と6回、ソロで4回くらいだけどね」

充分多いから！とリーナは思った。

「最初は俺もびびったよ？ほとんど逃げ回ってたし、けどイアンクツクはハンターからクツク先生って呼ばれてるんだ。このモンスターは大型モンスターの基本的な動作を備えてて、イアンクツクを狩猟する新米ハンターが育つことからそう呼ばれてる。近づいてきたね。リーナはいつも通り後方からの援護お願い」

「わかった！」

返事を聞くなりラグナはイアンクツクの前に飛び出し、リーナはLV2通常弾を装填した。

こうして、イアンクツクとの戦闘は始まった。

ラグナがイアンクツクの視界に入るとイアンクツクは敵に威嚇する。

「クエエツ！クエエツ！クエエツ！！」

「チヨ ボールウー」

イアンクツクとの挨拶が終わり、ラグナは走り込みイアンクツクに斬りかかろうとする、が

「クツ！」

ラグナは緊急回避で右側に転ぶ。間一髪避けることが出来た。
先ほどラグナが居た場所にイャンクックの鞭のような尻尾が通過した。

「危なかったな」

イャンクックは回転しこちらに向き直り、ラグナに噛みつきのもーションに入る。

「ダンッ！ダンッ！」

リーナが撃った弾はイャンクックの頭部に撃ち込まれたが動きは止まらない。ラグナはバックステップして距離を開くとそのまま抜刀斬りのもーションに入る。

リーナはその間にイャンクックの後ろに移動してLV2貫通弾を装填。

イャンクックの噛みつきが空を切ると、ラグナはイャンクックの頭部に斬りつけて、リーナは尻尾から頭にかけて貫通弾を撃ち込んだ。

ダンッ！　ダンッ！

ザシュッ！

「クエエエエツッ！！」

イャンクックの頭からは血が吹き出し、撃ち込まれた傷痕からも血が流れた。

イャンクックの瞳の色が変色し、口許からメラメラと炎が溢れて

耳は開いていた。

ラグナはイヤンクックが怒り状態になったと気付いてリーナに指示を出す。

「リーナ！麻痺弾を撃ち込んで！」

「うん！」

リーナは装填し撃ち込んだ。

ダンツ！ カチツ！ カチツ！

ベチャツ！

「あ、ペイント弾と間違えた！……テヘッ」

「テヘッじゃねえよ！」

ラグナは突っ込みを入れた。イヤンクックは自分の身体を汚されたのが気に入らなかったのか、リーナに向けて火炎液を放った。

「危ないリーナ！間に合わねえツ！避ける」

「キャツ！！」

ドゴンツ！

リーナは慌てて回避したが無傷と言うわけにもいかず、火炎液が地面に衝突した衝撃で吹き飛び気を失った。

「くっ、リーナ！大丈夫か？この野郎てめえ！！」

ラグナは背を向けているイヤンクツクの背中を斬りつけた。イヤンクツクは普段攻撃が当たらない場所に斬りつけられ怯んだ。

「まだまだあ！」

怯んだイヤンクツクにすかさずなぎ払いを叩きつける。イヤンクツクは堪らさず身体を回転させ、しなる尻尾でラグナを弾こうとするが。

ブンッ！

風切り音と共にラグナは尻尾の下を潜り抜け、がら空きのイヤンクツクの顔面を切り上げる。

「オラアッ！」

バシユッ！！

音と共にイヤンクツクの顔面から血が吹き出し、頭の部位を破壊した。

イヤンクツクはやせ我慢の用な鳴き声で威嚇して羽ばたき、ラグナから距離を取る。

「クソッ！風圧が！」

ラグナが風圧から解放されイヤンクツクを見ると。イヤンクツクは耳をたたみ、足を引きずっていた。

「巢に帰るつもりかッ……チッ！」

ラグナは追い掛けずに、リーナの元に急いだ。

「リーナ！大丈夫か？おいッ」

ラグナが二、三度リーナの頬を叩くと気が付いた。

「リーナ！痛い所ないか？」

「……あなた……誰？」

記憶喪失。ラグナは頭に瞬間的に浮かび上がり、あまりの事の重大さに言葉を無くした。

「イヤンクツクは？」

「……は？」

「だからイヤンクツク！倒したの？」

「リーナ……。さっきの『あなた……誰？』なんだ」

リーナはケラケラ笑いながら話した。

「あれは冗談！ラグナがどんな反応するかなーって思って」

ラグナはふるふる震えている。

「ら、ラグナ？怒っ」

「当たり前だバカ野郎！いきなり記憶喪失フラグ立てんじゃねえ！何て笑えねえ冗談だよ！どれだけ心配したかわかってんのか！？」

「ご、ごめんなさい！ちよつと重すぎたよね！許して下さい！！」

涙目で責めるラグナを見て、やりすぎたと認識したリーナはすぐさま謝る。

「ホントにごめんなさい！身体もちよつとした打ち身で問題ないから大丈夫だから！」

ラグナも本当に大丈夫そうなりリーナを見て安堵し緊張を解いた。

「そっか……ホントによかった」

「心配かけてごめんね。それとありがとう……」

リーナはラグナが本気で心配してくれた事がとても嬉しかった。それに少し恥ずかしかった

一時的にキャンプに戻ってきた。ラグナがリーナに話かける。

「これからどうする？イャンクツクの討伐は本来クエストのクリア条件にない」

リーナは正直怖かった。イャンクツクがリーナに放った殺気に、一歩間違えれば死んでしまうような威力の攻撃に。だけど。

「討伐しよう！あと一歩なんだし！」

「そうか。わかった！じゃあ、行くか！」

ラグナはリーナの気持ちを察した。だから止めなかったし、そう言ったリーナの言葉は同じハンターとして嬉しかった。別に倒す必要はない。討伐のクエストじゃないし、イヤンクックを狩ってもその分の報酬が貰えるわけじゃない。二人の考えてる事はそんな事関係なかった。

あるのはただ純粋なハンターの誇り。

第十三話 先生の授業（後書き）

どうも。江久世蓮人です。今回でクック先生の授業終われなく
てすいません！次回決着と忘れられた釣りバトルの結果です！お楽
しみに。感想頂けると励みになります。

第十四話 決着と罰ゲーム（前書き）

どうも江久世蓮人です。更新遅くなってすみません。（<ー>）
のでいつもより少し長めです。

第十四話 決着と罰ゲーム

「ZZZ ZZZ ZZZ」

ラグナとリーナが洞窟に入るとイャンクックは眠っていた。目を開けたまま。

「うわっ！目開けたまま寝てるよ？キモ」

リーナがさらっとひどい発言。

「俺はイャンクックに溜め斬りするからリーナは今度こそ麻痺弾を撃ち込んでくれ。一気に決める」

リーナは頷きラグナはイャンクックの前行き溜め斬りの態勢に入る。この場面でする必要はないが、ラグナは目を閉じる。

「ハアアアアッッ！！」

ザンッ！

「ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！」

「クエエエエッ！？」

ラグナは溜め斬りをイャンクックの頭に振り落とすと強烈な痛みがイャンクックを夢の世界から引き出した。間髪入れずリーナが麻痺弾を撃ち込む。

「もう一発っ！」

ラグナは降り下ろされた大剣の刃を反転さして斬り上げる。
ラグナの斬り上げた大剣はイャンクツクの嘴に当たり弾かれる。

「クエエエエッ!!」

イャンクツクは睡眠を邪魔されてご立腹な様子だ。口から火を吹き出し怒っている。

「ダンッ!ダンッ!」

その時リーナが麻痺弾を撃ち込んだ。

イャンクツクはまるで、

「何だあ?」とでも言いそうにリーナの方を向く。

振り向いた直後イャンクツクは固まった。ふるふると小刻みに震えている。まるで十年間離れ離れた子供に会う母親のように。

「リーナ。知り合い?」

こんな状況でもボケを入れるラグナ。

「そう……あれは十年前……って違う!麻痺弾よ!」

緊張感の欠片もない二人。コントも終わり、ラグナはイャンクツクの腹を斬りつけ、リーナは貫通弾を撃ち込む。

「クエエエ……」

麻痺の効果が切れると同時にイヤンクックも息絶えた。

ドシンッ！

イヤンクックは倒れた。

「お疲れ。頑張ったな！リーナ」

「うん！私倒したんだね！イヤンクック」

リーナはイヤンクックを倒せた事を喜んでいた。

パタンッ！

気が抜けたリーナは倒れた。

「……！！おいっ！リーナ！」

ラグナはリーナの元へ駆け寄った。

「スーピー スーピー」

初めての大型モンスターの狩猟で疲れたのだろう。眠っていた。

「よかった。寝てるだけか。しょうがねえなあ」

ラグナはイヤンクックを剥ぎ取りして、リーナを背負いキャンプまで運んだ。

キャンプに着きリーナを簡易ベッドに寝させる。

「さて、俺もリーナの横で一緒に……ってそんなことしねえ！まだその展開は早い」

ラグナは訳の分からない事を一人喋っている。

「あ！釣り対決勝負決まってるな。どうするか」

ラグナはチラッとリーナを見る。

「今日は帰るか。もう夕方で勝負も俺の勝ちだし」

結局この日は町に戻ることにした。

ドンドルマの町に到着した。リーナを背負って酒場に行くわけにもいかないラグナはリーナを起こすことにする。

「リーナー？起きろよー？襲うぞー？」

「スーピー スーピー」

「……………」

起きないリーナをラグナはこそばしてみた。

ドゴツ！！

綺麗な放物線を描いて、リーナの放った拳はラグナの顔面にメリ込んだ。

「ウゴアツ！！は、鼻がいてえ……………」

ラグナは鼻を押さえてのたうち回っている。
その音で気が付いたのかリーナは目を覚ました。

「あれ？私寝てた？ねえラグナ、ってラグナどうしたの？」

ラグナはイヤンクツクを倒した後の事をリーナに話した。こそばした事は伏せて。

「ごめんねラグナ！迷惑かけて！よかれと思って起こしてくれたのに殴って……」

「いや。いいんだ。俺も悪いし。気にしてないから。いやー良いパンチだった。寝ているはずなのに何故か腰の入った良いパンチだった」

「だからごめんってー！」

「冗談だよ。痛いのは本当だけど。まだ報告してないから酒場に向かおうぜ」

ラグナはこの時、リーナを起こす時は気を付けようと思った。

酒場に着くと、今回のクエスト報告と黄金魚の精算、イヤンクツクの討伐報告を済ませた。

「カンパーイ」

いつも通りクエストの後のプチ宴会だ。

「じゃあ今日の報酬の発表だ！まずクエストの基本報酬400ゼニー、んでイヤンクツクの討伐金が3000ゼニー。そして今日の本

命！黄金魚が計17匹で8500ゼニー！トータルで11900ゼニー！」

「やったねラグナ！」

リーナも喜んでいる。しかしリーナは忘れていた。そんなにラグナがニヤリと笑い言った。

「ほいリーナ！今回の報酬な。それと何か忘れてないか？」

「え？なんの事？」

リーナは報酬を受け取って、ラグナに言われて何を忘れたか考えている。

「ヒントは黄金魚」

ラグナがリーナにヒントを出した。すると

「あっ！そうだった！結果は？」

「リーナは寝てたし俺の不戦勝かな。現に9対8でおれのが多いし。つて事で罰ゲームな」

リーナは反論しようとしたが諦めた。寝てしまったのはリーナの責任だし、対決でも負けていたと言えば負けていたからだ。しかも寝てしまつてラグナに迷惑をかけた負い目も感じていた。

「くっ！わかつたわよ」

「内容は帰ってからで。今日は飲もう！」

テンションの高いラグナと反対に低いリーナ。結局飲み終わって家に着いたのは日付の変わる少し前だった。

家についてそれぞれ風呂に入り着替えを済ませた二人はリビングにいる。

なぜか空気は張りつめていた。その訳は

「ラ、ラグナその罰ゲーム本気で言ってるのッ？」

「ああ。本気と書いて必死だ。まちだ」

その罰ゲームとは

「ダメ！無理！恥ずかしいし！出来ない！プライベートシリーズ着るなんて！しかもセツトで一週間メイド口調とか死ねるよ！」

「んん？勝者は敗者の言うことを聞くんじゃないかな？」

ラグナは笑いながらリーナを追い詰める。

「お願いだから！それ以外にして！」

リーナは涙目で懇願している。

「しょうがねえなあー！じゃあヒーラーシリーズで」

「恥ずかしさ変わんないからそれ！」

「そっか。リーナが着たら似合うし可愛いと思うんだけどな」

出た！必殺天然女殺し！

「そ、そおかなあー？そこまで言うなら着てもいいかも」

リーナは少し恥ずかしそうに照れながら言った。

「本当？わかった！明日買ってくる！」

ラグナは嬉しそうにはしゃいでいた。

「買ってくるって、ラグナ知らないじゃん？私の服のサイズ」

「ん？何言ってるんだよ？そんなもんパツと見たら分かるし」

リーナは慌てて身体を手で隠す。

「そ、そんな事で、出来るわけないでしょ！」

「いやいや、出来るんだって。あれはそう」

ラグナは静かに喋り出した。

俺が十四才の時だった。

「ラグナ！今日は狩りじゃない！喜べ！」

「狩りじゃない？何だよ」

「今日は女の観察及びスリーサイズ当てだ」

「……………」

スパコーンツ！

俺は無言で近づき履いていたスリッパでバカ親父の頭を叩いた。
この頃の俺は言葉でいくら突っ込んでもこのバカ親父が理解しないと分かると無駄に言葉で対応するのを諦めていた。

「ナイスツツコミ！つじゃない！親を打つとは！ラグナ成長したな！じゃあ行くぞ」

「こらバカ親父！行くなんて言ってねえから。何でスリーサイズだよ？」

「ラグナの動体視力の強化と判断力の向上の為だ。心配はいらん！俺は見切り+3だ。正解かどうかは俺が判断する」

「……………なあバカ親父様よ。訓練の意味はわかったよ。他にも方法はあるだろ？」

「この訓練の最大の特徴はそれだけじゃない」

「何だよ？」

「訓練では目の保養になり、実践では彼女や気になる女性へのプレゼントの際に役に立つのだ！」

「……………はあー。よくわかったよ。やるよ」

ラグナはこの頃になると諦めていた。馬鹿は死ななきゃ治らないって言うだろ？

「よし！町に行くぞ！」

「こんなこともあって俺は見切り+3のスキルを手に入れたわけだからリーナのスキルサイズもわかる。上からB&ぶべらっ！」

「最低！バカ！変態！何が見切り+3よ！かつこつけた名前だけで実際変態×3じゃない！知らない！」

リーナはそう言うと自分の部屋に帰っていった。

この後ラグナがリーナの部屋の前で土下座して罰ゲームの無効と交換でやっと許してもらえた。

「見たかったなーリーナのプライベートシリーズ姿」

ラグナは自室でそう呟き眠りについた。

第十五話 新たな仲間

ラグナとリーナがイヤンクックを初めて倒してから一ヶ月。その間にイヤンクックを三回討伐して甲殻種ダイミョウザザミの討伐も果たしていた。

その為ラグナの装備はイヤンクックシリーズにレッドピアス、武器は新たにダイミョウザザミの素材を使ったグレートシザーを作成し、リーナも全身ザミシリーズに変更した。武器は変わらずショットボウガン・碧を愛用している。HRも3に昇格して駆け出しハンターを卒業したようだ。

ラグナとリーナはもう朝の日課となっている鍛練を済まし家で朝食を済ましリビングで今日の狩りの段取りを話していた。

「ラグナもザザミシリーズにしたらいいのに」

リーナは自分と同じザザミシリーズの防具をラグナに来てほしかったようだ。

「あんなアメフト装備着るくらいならクック装備の方がまだマシだよ。確かにザザミ装備に比べたら防御は落ちるけどそれくらいはなんとかカバーするし」

ザザミ装備は女性ハンターからすれば人気は高い。防御面はしっかりしていて尚且つオシャレだ。赤いスカートが特徴で多くの女性ハンターが愛用している。しかし男性用のザザミ装備はお世辞にも外観はいいとは言えない。たしかに防御面はクック装備や駆け出しハンターにとってはありがたいのだが。

「私にしてみればクック装備も外観がいいとは言えないよ?……目立つし」

「あーもう! わかってる。いつまでもクック装備でいようとは思ってないさ。あくまで現時点の最高装備がこれなんだ。しょうがないだろ?」

ラグナも目立っているのは知っているようだ。だがやはりアメフトが気に入らないらしい。

「とりあえず酒場に行ってみよう。何か依頼があるかもしれない」

2人は酒場に向かった。酒場に着くと既に多くのハンターが集まっていた。

「んー何かあるかなー?」

リーナは掲示板を見ながらクエストを探している。

「リーナ。これにしようぜ」

リーナはラグナの元に行きクエストを確認する。

「えーと、何々? 場所は森丘の奥地で商人達の運搬の救助及び護衛?……対象モンスターが……えっ! リ、”リオレイア”!?!」

リーナは驚き受注書を持ったまま固まっている。

「そっ!“女王”リオレイアだ。俺達の実力を計るのも良い機会だ

しな」

「そ、それにしてもいきなりリオレイアはきつくないかな？」

リーナは少し不安そうにしている。

「確かに飛竜種は他の種と比べて戦闘力は桁違いだ。けど俺達はハンターだ。倒せない相手じゃない。それに既に一人受注していてPTの募集をかけてる。商人達も危険な状況の中助けを待ってるし時間もない。どうする？」

ラグナは真剣な面持ちでリーナに問う。

「……そうだよな！助けを待ってる人がいる。迷ってる時間はないよね！行くっ」

リーナは決意を固め、ラグナに答えた。ラグナも頷き先に受注したもう一人のハンターがいる席に向かう。

「……商人達の救助及び護衛、リオレイアの討伐。受注したのはあんたか？」

ラグナは窓辺に座っている一人の少年に声を掛ける。

「……ああ。そうだ」

無感情な声で答えた少年は黒髪黒眼で目鼻立ちは通り端正な顔立ち。顔はまだ幼さが残るがその佇まいは立派なハンターだ。レウスシリーズを身に纏い腰には双剣が携えてある。

「俺達もPTに入れてもらいたいんだけどいいか？」
すると少年はラグナとリーナの装備を見て少し考える。

「俺達の装備が不満……って感じか？」

ラグナは少し不満そうに尋ねる。

「……いや、大丈夫だ。腕があれば装備は関係ないからな。そちらも俺でいいのか？」

「ああ。問題ないぜ？」

「うん。私も大丈夫だよ」

「そうか。でわよろしく頼む。俺はラセ。神月ラセだ。見ての通り武器は双剣のレウスデスクロウズだ」

少年は立ち上がり手を差し出す。

「俺はラグナだ。武器は大剣使い。よろしくな」

「私はリーナ。武器はガンナーだよ。よろしくね」

三人は共に握手し自己紹介を済ませる。

「準備が出来次第クエストに向かいたいんだが良いか？」

ラセは準備が整っているようだ。二人に準備の確認を促す。

「俺達も準備は出来てる。早速森丘に向かおう」

こうして三人はクエストに向かった。

“女王”が住む森丘へ。

第十五話 新たな仲間（後書き）

更新遅くなって申し訳ないです（<|>）色々リアであったのですが言い訳はしません！すいませんでした！ さて第十五話！今回は以前行いました募集で決まりました第三の人物が登場しました。提案者の神月ラセ様ありがとうございます！それとお待たせしました
これからのラセの活躍をご期待ください！

第十六話 過去

ラグナとリーナ、そしてラセは森丘に向かうため竜車に乗り込んだ。
だ。

森丘はドンドルマの街から東に竜車で約三時間の場所にある。

「では行くニヤー！」

アプケロスに乗ったアイルーが張り切っている。

竜車の後ろに引かれている台車の中では三人はがそれぞれ離れて座っていて、気まずさと静寂があった。

「……………」

「……………」

「……………」

我慢できなくなったラグナは会話を切り出した。

「……………なあ。ラセって一体いくつなんだ？」

「うんうん。ちょっと私も気になってた」

胡座をかいて座っているラセは瞑っていた瞳を開けて答えた。

「……………十五だ」

「えええええー！？同年！？」

ラグナとリーナは声を合わせて驚いた。

「同年かよ？いやー焦った。でも凄いな。その年でリオレウス倒したんだろ？その格好からすれば」

ラグナは少し興味が沸いてラセに聞いてみる。

「お前には関係ない」

ラセはそれだけ言うと目を閉じた。

「あれ？まずい事聞いちゃったみたいだな。詮索してごめんな？」

「……いや、気にしない。ラグナも気にしないでくれ」

リーナは一人おろおろしている。

「と、とりあえず今回の作戦を立てよ！ねっ！」

リーナは雰囲気を変えようとしたのか気を利かしてフォローする。

「んーそうだな！ラセ、何か考えあるか？」

「いや。二人の実力が分からないから組み立てが出来ない」

「んー実力か。だけどどうやって力量を計るんだ？」

ラセは少し悩んでラグナとリーナに向かって言う。

「簡単だ。俺と対人戦をしてもらおう。安心してくれ。俺はHR3だ」
「なんだ！ラセもHR3なのか！俺とリーナも同じだぜ？」

「む？ラグナとリーナも同ランクなのか？では大丈夫だな。すまないな。試すような口ぶりだ」

実は十五才という年齢でHR3という肩書きは稀だ。余程の強さと才能がない限り十五才という年齢ではあり得ない事である。

「気にしちゃいないさ。自惚れてるわけじゃないけどそれぐらいの努力をしてるし自信もある」

「私はまだ自信はないけど精一杯頑張るよ」

「いや、飾りでないことはわかっている。簡単にHRは上がるものでもないし気持ちだけでは到底無理だからな」

ラセは同じ立場ということで少し心を開いたのか表情が少し緩んだ。

「まあまだ俺達ハンター歴二ヶ月だからな。ラセのが多分先輩だろ？」

「！？二ヶ月だと？」

この時初めてラグナとリーナはラセの感情の入った表情を見た。

「えーと、正確には一ヶ月と半月ぐらいかな？」

リーナが細かい情報を提供する。

(……約二ヶ月でHR3に上がる程の二人か。面白い。こいつらなら……)

「……ラグナ。聞きたがっていたな？俺がなぜこの年でレウス装備をしているか」

「ん？ああ。でもいいぜ？無理して言わなくても。言いたくないんだろ？」

ラグナは少し驚いたが人にはそれぞれ言いたくない過去や踏み込んでほしくない領域があるのをわかっているから聞き出そうとはしなかった。

「いや話す。その代わりにいったら痴がましいが二人に頼みがある」

ラグナとリーナは何の事かわからないが聞くことにした。

「頼みつてのは？」

ラセは真剣な面持ちになり口を開いた。

「俺を“仲間”として迎えてほしい。これからも一緒にPTを組むという事だ」

予期せぬラセの申し出にラグナとリーナは顔を見合わせる。

「……えっと、俺としては大歓迎なんだが。リーナは？」

「えっ？うん、私も問題ないよ？心強い仲間が増えるのは嬉しいし」

「俺達は問題ないけど、ラセはいいのか？俺達で」

ラセは二人が了承してくれたことに安堵し話始める。

「ああ。お前達だから良いと思ったんだ。……俺は十年前親を失った。原因は村を古龍が襲撃したからだ。村は全壊して村人も俺以外殺されたよ。一人になった俺は絶望の淵に立たされ生きる道はなかった。正直幼いながらも親の後を追って自ら命を絶とうとも考えた。だが俺にもまだ出来ることがあったんだ。親を、村を、人生を壊した古龍に復讐する為に生きようと。それだけが俺の存在意義になった。それから村を出て三日経った日だ。まだ五才の俺が一人で生きていけるほどこの世の中は甘くない。食べ物もなく行く宛もない俺は力尽きる一步手前だった。森の中に入り食料を探していた時に運悪くランポスの群れに遭遇した。当然五才の俺がランポスに立ち向かえるわけもなく逃げ出したがすぐに囲まれた。その時死を覚悟したよ。俺は死ぬ。力が抜けて地面に頂垂れた。その時だ。いきなりものすごい風と共に赤い鱗に巨大な体躯、他者を圧倒する凄まじい存在感、リオレウスが舞い降りた。ランポスの群れは突然やって来たリオレウスに困惑して身動きが取れないでいた。俺はチャンスだと思い震える足をなんとか抑えて逃げ出そうとした。その時だ。リオレウスが咆哮し威嚇の声をあげた。ランポスは恐れをなして逃げ去った。俺はあまりの恐怖に情けないが気を失ったよ。気が付くとそこは洞窟だった。『名は何という』そんな声が洞窟内に響いた。俺は自分一人だと思っていたので周りを見渡した。人ではないがソレはいた。リオレウスだ俺は瞬間的に考えた。俺は“餌”だと。その為にここに連れてこられたと。『名は何という』もう一度リオレウスが俺に聞いてきたよ。その時

俺は飛竜って喋れるんだ。と思ったよ。実際喋る飛竜やモンスターは報告されているが、それは極稀に存在するらしい。その時の俺はそんな事知ってるわけもないが。
こうして俺とリオレウスは出会った。

リオレウスは俺を食べる為に連れてきたわけではなく、ただ単に気まぐれらしい。そして俺は十四才になるまでリオレウスと共に生活した。だが別れは突然だった。いつものようにリオレウスは餌を求め森に出ていった。帰ってきたリオレウスは足を引きずり、血は全身から吹き出し、最早瀕死の状態だった。俺はリオレウスに駆け寄ったよ。今まで少しの怪我をする事はあったがここまでの傷は初めてだった。どうやらハンターにやられたようだ。リオレウスは瀕死の状態にも関わらず俺に諭してくれた。人間界の事。

俺が一人になった時の事や生きる術を。リオレウスは間もなく息を引き取った。正直ハンターを人間を恨んだよ。しかし自分もモンスターを恨んでいた。親を殺された村を破壊したモンスターを。両方の気持ちかわかる。人間の世界で生きていくのならモンスターを狩る事は仕方のない事も。俺はリオレウスと共に生きると誓い。リオレウスの素材を剥ぎ、街に降りたよ。それが俺の生きる理由で、それがこの装備の意味だ」

ラグナとリーナは黙って真剣に聞いていた。

「そうか。ラセも色々あったんだな。てか話長い」

「うん長いね」

「……すまん」

ラセが謝るとラグナとリーナは笑った。

「ははっ！嘘だって。話してくれてありがとな！これからよろしくな」

「そうだよ！よろしくね」

「ああ。「ちら」そよろしく」

ラグナとリーナは改めてラセに手を差し出し固く握手した。

「そろそろ着くみたいだぜ？準備しようか」

「うん！」

「ああ」

こうして新たにラセがPTに加わり、新たな絆が生まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8795h/>

モンスターハンター ~幾重の絆~

2010年10月10日01時28分発行